

「ぶんせう」解説

——國學院大學図書館蔵善本解題V——

徳江元正

〔一〕

例のごとく、松本隆信氏編「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』、昭58）で「文正草子」の項を引いてみると、伝本は八十本余を数えることができる。それらの中には、「旧蔵本」であって現在行方の知れぬものや、明らかに散佚したと目せられるものもある。在外のものも十数本を数え、それらの大部分は、昭和五十三年夏に行われた御伽草子の国際会議の折に見いだされたものである。また、この目録が作製される時点において、本文未調査の伝本が八点含まれている。

國學院大學図書館に所蔵されている「文正草子」も数点あるが、その一点は右の目録の終りから三項目のところに

※国学院大（江戸初）奈良絵本 横三冊

とあり、目下のところ揃い本はこれのみ、慶長頃の写と考えられるもので、私がいうところのA型の奈良絵本^{（註1）}、鳥の子紙を料紙として用いた古い方のかたちの奈良絵本の一つ、この本の位置づけをあらあら説きまらしようというのが小稿の主たる目的である。研究というのも憚るこの為事は、※印から外してこの一具の奈良絵本を、松本氏がうち樹てた精緻なる分類項目のいずれか

に組み入れてみようとの試みと、江戸前期に数多く製作されたいわゆる横本の奈良絵本の出自を究めてみようとのささやかな宿願の、その一ツの階梯にはかならない。

勿論この為事は、「最も伝本の多い作品」^(註2)とされる「文正草子」諸本をくまなく博搜した上のもではなく、あくまでもそれらの一部に光を当てるだけのことである。恐らく、「文正草子」の諸伝本に最も通曉しておられるのは、八十数本を分類・整理された松本隆信氏であろう。若し私の記憶に誤りがなければ、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」が公刊された年の秋、説話文学会例会での松本氏の発表がこの「文正草子」を中心にとりあげたものであり、右の「増訂」版の数を遙かに上越す諸本目録をプリントにして配られたことがあった。^(註3)

本学図書館蔵の奈良絵本「ぶんせう」上・中・下三冊を、公刊された諸本の中、最も近い本文——兄弟関係にあつて、恐らく共通の祖本を有するものと考えられる——との比較を試み、一体、いかなることを言い得るか。それは、たぶん、どのくらいの相違があるか、ではなくて、どのくらい似通っているか、ということを検出することとなろう。

まず、とりあげてみる他本とは、『室町時代物語大成』巻十二所収、赤木文庫旧蔵本の「ぶんしやう」のことである。同書の解説(四五ページ上段)に、「奈良絵本、二冊。横形本。竪一七糎、横二八・七糎。江戸初期、慶長・元和頃の製作といつてもよい、横本としては古色のある奈良絵本である。鳥の子紙打曇表紙。」とある。「慶長・元和頃」・「古色」とあるからには、凡そこの一点が、私の言う奈良絵本のA型で、既に言いならわしている古奈良絵本^(註4)とみて間違いあるまい。以下、この赤木文庫旧蔵本を、a本と呼び、本学図書館蔵本をb本と呼ぶこととする。

次に、國學院大學図書館蔵本の「ぶんせう」三冊の簡潔な書誌を記す。

縦凡一六・七糎、横凡二三・三糎、表紙紺紙、金泥にて砂子を散らし雲を描き、草花を配す(上・中・下とも)。題簽(一一・七×三・〇)井桁に金箔を押した短冊型に「ぶんせう 上(中・下)」と墨書、表紙の中央上部に貼る。見返し、金箔、料紙、鳥の子紙、虫損の部分は補修してある。漢字交じり平仮名文、一面十四行、内題なし、本文に濁点を付けることまゝあり、漢字に

訓みを付す例もある（a本にも稀に見られるが、b本の方が遙かに用例が多い。后・二位・女郎花・菊・尋・手箱など。后は二例アリ）。和歌は、冒頭部を凡一字分下げ、二行書き、時に三行書きにすることもある。丁数 上 二十四丁、中 二十三丁、下 二十二丁。絵には古色を留めると考えられる箇所が一・二ある。上巻 二オ・四オ・六オ・九オ・十一オ・十三ウ・十六オ・二十一オ、中巻 三ウ・七オ・十一オ・十二ウ・十六オ・十七ウ・二十オ・二十一ウ、下巻 二ウ・四オ・六オ・八ウ・十三オ・十五ウ・十八オ・二十ウ。上巻の四オは、『御伽草子の世界』に三ウと見開きでカラー図版で入っている。下巻四オの雲型と霞とを用いた様式（カラー図版参照）、また同六オの二位の中將殿が直衣姿でなく商人のさまに画かれているのも一興である。絵が少いのは本書の特色である。a本は三十三図、b本は二十四図、見開きなっているところはない。例のごとく、絵の面は詞の料紙とは別で、ヤマのところで貼り合わせてある。

次に区切りについて記す。二冊本のa本は、東下する中將の一行四人が、山中で「見とをしの尉」に出遭ったところで上巻が終り、下巻は

さて、その、ちは、たのもしくおもひて、御あしのいたさも、おほえす、いそきたまふ

とあって、都の内裏での騒ぎへと移る。三冊本のb本では、上巻は国司が常陸国から都へ帰り着いたところで終る。中巻は、中將の一行が御堂で樂を奏でるのを聴聞した文正がさまざまな物を参らせたので、聳引出物だと言って兵衛介たち供の人々が笑い合うところまで。

次に、絵の内容について記す。

上巻〔第一図〕鹿島大宮司ノ屋形、座敷ニ大宮司さだみつ、後ノ屏風ニ金泥ヲ用ウ。庭上ニ雜式ノ文太、上部ハ空色ノすやり

霞、下部ハ白色ノすやり霞、屋形左上リ（右下ガ三角形ノ空間ヲナス構図）。

〔第二図〕つのおかが磯、薪ヲ運ブ文太、波打際ニ塩釜ニツ、里ノ男・童、手前ニ松ノ木、上部・下部トモニすやり霞ニテ区切ル（『御伽草子の世界』に掲出）。下ノ霞ニ金・銀泥ノ雲型。

〔第三図〕文正ノ屋形ノ中、文正、ソノ妻、女房一人、菓子ノ台ノ物、几帳、屏風ニ金・銀泥、廊ニ男ノ童、左上リノ構

図(但シ空白部右上)。

〔第四図〕同文正ノ屋形、金・銀泥ノ屏風ノ前ニ文正、几帳ノ後ロニソノ妻、縁ニ女房一人。

〔第五図〕右上リノ構図ニテ、鹿島ノ明神ノ社頭、縁ニ額ヅク文正夫婦、縁ニ家臣、手前ニ神樂殿、舞ヲ舞ウ巫女、社人兩名、庭上ニ輿、家ノ者男女八人、向ウ波打際。上ノ霞ニ金・銀泥ノ雲型。

〔第六図〕文正ノ屋形、座敷ニ文正ト、赤子ヲ抱ク女房、襖ハ金・銀泥、縁ニ女房一人、右上リノ構図。

〔第七図〕文正ノ二人ノ姫達ノ部屋、几帳ノ蔭ニ蓮華御前ト蓮御前、三人ノ女房ニトリ囲マレテ、大名タチカラ寄せラレタ文ヲヒロゲ読ムトコロ、傍ニ文函。屏風ハ金泥、襖ハ銀泥、右上リノ構図、空白部ハ右下。

〔第八図〕関白家ノ一間、屏風ノ前ニ直衣姿ノ二条ノ中将、手前ニ狩衣姿ノ国司、右上リノ構図、左上ガ余白。

中卷 〔第一図〕関白家ノ中ノ一間、金・銀泥ヲアシラウ屏風ニ藤花ノ絵、前ニ関白殿、座敷ニ中将殿トソノ傍輩、笙・和琴・琵琶ナド、縁ニ童、雲ノ向ウニ山ナミ、満月。上部ハすり霞ト雲トガイツニナッテイル珍シイ構図。雲ニ金・銀

泥ノ雲型ヲ付ケル。(カラー図版参照)

〔第二図〕関白殿ノ屋形ノ一間、几帳、金・銀泥ノ屏風ノ前ニ直衣姿ノ関白殿ト北ノ方、女房一人、左下部蔀格子、縁、左上リノ構図、右上ガ余白。

〔第三図〕商人ノ姿ニ身ヲヤツシテ東国ヘ下ル中将殿ノ一行四人、山中デ「見透しの尉」ニ行き逢ウトコロ。下部ノすり霞ニ金・銀泥ノ雲型、上部ノ山ノ向ウニ金・銀泥ノ雲型。

〔第四図〕常陸国ノ文正ノ屋形ニタドリ着イタトコロ。門ノ内ニ下女一人、外ニ中将殿ノ一行四人、案内ヲ乞ウトコロ、紅葉ノ立木、上ノ霞ニ金泥ノ雲型。

〔第五図〕庭ニ面シタ文正ノ屋形、出居ノ座敷ニ文正夫婦、後ロハ金・銀泥ノ屏風、縁ニ家臣・老女・下女・女ノ童ナド。庭上ニ中将殿ノ一行、紅葉ノ立木。右上リノ構図。

〔第六図〕文正ノ屋形ノ一間、飯ヲトル中将殿、同シク傍輩三人、縁ニ家ノ者、庭上ニ下女三人。中将殿ノ後ロハ金泥ノ

屏風。右上リノ構図。

〔第七図〕文正ノ屋形ノ姫君達ノ一間、手函ヲ開ケテ中ノ薄様ノ文ニ眺メ入ルトコロ。女房二人。几帳、金・銀泥ノ屏風。

〔第八図〕文正ノ屋形、西ノ御堂ノ内ニテ、中将殿ハ琵琶、兵衛介ハ琴、当間介ハ笙、式部丞ハ横笛ヲナラシカナデルトコロ。中将殿ノ後口ハ金・銀泥ノ屏風、藤ノ花。右上リノ構図、左上ガ余白。

下卷 〔第一図〕御堂ノ内デ管絃ヲ奏デル中将達四人、左隅ニ文正、御簾ノ向ウニ蓮華御前ト蓮御前、女房一人、手前ニ女房達

三人。中将達ノ後口ハ金・銀泥ノ屏風。

〔第二図〕姫君ノ間ノ内、几帳・屏風、ソノ間ニ蓮華御前トソノ女房、屏風ハ金箔、襖・格子ノ向ウ縁、ソノ向ウハ山、満月。上部ハ雲、下部ハすり霞。左上リノ構図。中卷〔第一図〕参看。

〔第三図〕同シク姫君ノ間、右上リノ構図、葩格子ニ囲マレタ一間ニ、几帳・金・銀箔ノ屏風ノ中、二条ノ中将ニ添ウ蓮華御前、外ノ縁ノ画キ様、古キ奈良絵ヲ偲バセル。又中将殿ガ直衣姿デナク画カレテイルノニモ注目。

〔第四図〕大宮司さだみつノ宿所ノ一間、装束ヲ改メタ中将殿ノ一行。庭上ニ男ノ童三人。右上リノ構図。

〔第五図〕中将殿一行ノ京上リ。馬上ニ三人ノ傍輩、臣下・仕丁ナド十三人。手前ニ丘、松ノ木、向ウニ山ナミ。上部ノすり霞ニ付ケテ金・銀泥ノ雲型。一行左ヘ向カツテ進ムトコロ。

〔第六図〕関白家ノ内ノ一間、右上リノ構図、余白ナシ。銀泥ノ屏風ノ前ニ蓮華御前、三宝、女房四人、几帳ニ金箔ノ文様アリ。

〔第七図〕蓮御前、ソノ父母ノ一行、京上リスルトコロ。中央ニ輿、馬上ニ文正、北ノ方、女房、供ノ者十人ナド。手前、向ウニ丘。上部ノすり霞ニ金・銀泥ノ雲型。左方ヘ歩ミユクトコロ。

〔第八図〕関白家ノ内、奥ニ二位ノ中将、蓮華御前、三宝、菓子ノ台ノ物、几帳、金・銀泥ノ屏風。手前ノ一間ニ三人ノ女房達、縁、左上リノ構図。

註1 小稿「文学と美術——中世文学史と奈良絵本——」（『國語と國文学』昭和の国語学・国文学 平三・五 特集号）参看。

2 『室町時代物語大成』卷十一所収「文正草子」解題参照。

3 昭和五十八年の説話文学会九月例会は東洋大学で開催され、「文正草子」に就いての松本隆信氏と、スライドを使つての海彼の奈良絵本や絵巻に就いての岡見正雄氏と、お二人の講話があつた。私は司会役を言いつけられていたが、怪我をして大津の病院に入院してしまつたので、伺うことができなかった。当日の松本氏のプリント資料も、目下探しあぐねている。

4 天理図書館善本叢書が「古奈良絵本」なる呼称を用いたのは、識見だと思ふ。『古奈良絵本集』一（昭47）に、四本の横本を収める（解題、岡見正雄氏）。鳥の子の料紙を用い、間似合紙を用いた奈良絵本よりも一周り大きく、製作年代も溯る。天地を霞で区切るものも、雲型で区切るものもある。b本「ぶんせう」には、双方交じり合つた構図が、二例認められる。

〔三〕

次に、a本（赤木文庫旧蔵本）とb本（國學院大學図書館蔵本）との対校表を掲げる。文の出入りはもとより、仮名遣いの相違から清濁の有無にいたるまで、巨細漏らさずとりあげた。

頁	段	行
46	上	3
		5
		7
		8
		御神
		ふんしやう 上
		なりいて、 しほうりふんた いかにと たつねれは 大みやうしん 御神
		ふんせう 上
		也いて、 しほうりふんやう (ナシ) たつねれは 大みやうしむ かみ

47	上	下
2	1	12
	15	10
	1	4
	2	1
	つのおか たちいて、	いゑのかず みめかたちじひ しやうちきにさととりめいを 一人にならん おろかに つのおか たちいて、
	つのをか たちよりて	いゑかず めかたち、ひ しやうちきにさととりめいを 一人ならん をろかに つのをか たちよりて

51													
上							下						
9	7	5	4	14	12	3	18	17	15	14	12	11	6
きゝて	ふんしやう	かさなりて	八かこく	ふんしやう	をしひらきて	夜はん	一人のこを	ふつしん	おほせつれと	はなれん事	まうけんとして	ふんしやう	かうふりし事は
													ことほりなりと

きゝて	ふんしやう	かさなりて	八ヶ国	ふんせう	おしひらきて	夜はん	一人のけうしを	かみほとけ	おほせられつれと	はなれん事も	まふけんとして	ふんせう	より(衍カ)あひくして
聞て													ことほりなりと
													かうふる事もなし 人に心
													をうつす事なし おろかに
													思ひ奉る事は
													ことほりなりと
													もたぬ事の
													ほひなき事に
													廿三
													わらは、
													あひくして
													うみ候へき
													わかからむ人
													むかへたまへと
													ふんしやう
													はなれん事
													おほせつれと
													ふつしん
													一人のこを
													夜はん
													をしひらきて
													ふんしやう
													八ヶ国
													かさなりて
													ふんしやう
													聞て

52													
上							下						
7	2	18	17	16	11	9	8	7	5	3	2	1	10
候はんすらむ	申とも	八かこく	すくれたる	女しこそ候へ	おのこ、より	おほせさふらう	心ゑなき事	ふんしやう	きゝてこよ	れいのこと、	まうけ給ふも	れいの事と	とひけれは
													をんなこと
													をんなこととて
													をんなこと
													ふんしやう
													まうけたり
													ひめこせを
													みめよく
													いかにかくは
													申やうは
													と申ける
													をんなこと

候はんすらむ	申とも	八ヶ国	すくれたる	女子こそめてたく候へ	おのこ、よりも	おほせやらん	心つきなき事	ふんせう	聞てこよ	れいのこと、	まふけ給ふも	れいの事と	といけれは
													をんなこと
													をんなこと
													ふんせう
													まふけたり
													ひめこせんを
													みめよく
													いかにかくは
													申やう
													と申
													うみ給と
													をんなこと

9 「ぶんせう」解説

53																																																				
上													下																																							
8	5	4	18	17	16	14	13		12	11		8		7	5	2	15	14		13	9	8	5	4	18	17	16	14	13		12	11		8		7	5	2	15	14		13	9									
八かこく	ふんしやう	のみ	ひめたち女ご	かひも	むまれたらは	これをきゝて	八かこく	かしつきけり	はしたまでも	ついちを	ちゝはゝ	さまなりとそ	なに事に	御心も	かゝる	うたを	あきは	花のなこりを	なけれとも	はちす御せん	いつくしき事	ありけり	ひめこせんも	ふんしやう	御ゆくゑ	八ヶ国	ふんせう	のみぞ	ひめたちは	かいも	うむれたらは	これを聞て	八ヶ国	かしつきける	はした物までも	つゐちを	みえける	ちゝはゝ	さま也とそ	何事に	心も	かかる	哥を	秋は	春は花のなこりを	なけれ共	はちすこせん	いつくしき事ハ	ありける	ひめこせんも	ふんせう	ひめたちの御ゆくゑ

54																										
上											下															
16	14	13	12	10	8	1	18	17	16	12	11	9	8	7	5		2	1	15	14	10					
ふんしやう	いかに	やゝありて	申いたさす	ふんしやう	ふんしやう	申いつる事	ふんしやう	なみた	おもはん人	とりまいらせ候へきなり	もんの	かへりけり	御返し	をんなこ	ふんしやう	なすへきなり	かうむると	大みやうたちの	ふんしやう	たえぬ所	けり	こんぐ七ほうまいらせに	すゑたてまつり	をさへて	ちゝはゝも	きゝ入たまはす
ふんせう	いかに	やうゝありて	申出す	ふんせうも	ふんせう	申出る事	ふんせう	涙	おもはむ人	とり参らせ候へきなり	門の	かへりける	御返事	女子	ふんせう	なるへき也	かうふると	大みやうものの	ふんせう	たえす所	にける	こむぐしつほうまいらせ	すゑたてまつり	おさへて	ちちはゝも	聞入たまはす

[illegible]

56																								
上												下												
6	7	14	15	18	1	3	5	6	10	13	14	16	17	18	1	2	4	5	8	13	15	16	17	
申ければ	のたまはす	大くうし殿の	ふんしやう	ふんしやう	ち、は、	かうゐ	ち、は、	そむかんと	うけ給候	ほいなければ	まつ	たひにけり	わか心	見つれとも	みうちの	たまはり候へ	うけたまはり候へ	もの	うけたまはり候	ふんしやう	たまはり候て	たまへは	ふんしやう	うけたまはり候ぬ
申けれども	の給はす	大くうし殿	ふんせう	ふんせう	父母	かうい	父母	そむかんとのみ	承る	ほいなければ	(ナシ)	たひにける	我心	見れとも	御うちの	給候へ	うけ給候へ	物	うけ給候	ふんせう	給て	給へは	ふんせう	承り候ぬ
おやの事を																							おやの事を	

11 「ぶんせう」解説

58																								57		
上												下												上		
18	16	15	13	11	9	8	2	10	8	5	4	1	18	16		15		14	10	8	7	5	4	3	2	
あひみに	おそれを	おもひ	もちいす	人く	もたず候て	きこしめし候はんする	あまになり	御うへ	御ふしん	山の中にも	すまひ	返しは	返し	つねをか		あしくして	こくし殿	き、給ひ候はぬ事	ふんしやう	のたまへ	ふんしやう	いひけり	なりまいらすへき	女しとて	女こをは	ものの
あひみむ心に	をそれを	(ナシ)	もちひす	人々	もたず	きこしめされ候はんする	あまに也	此うへ	御ふしむ	山の中にても	すまゐ	返事は	返事	つねおか		あしくとて	こくし	きらひ給はん事	ふんせう	の給へ	ふんせう	いひける	也まいらすへき	女子とて	女子をは	かとの

59																											
上												下															
5	4					1	18	17		16	15	12		11	8	7	6	5					4	3	2	1	
ふんしやう	心ことばも	てん人	申はかりなく	女し	きせひ	みちて候か	こんぐの	ありけん	おこなひもの	ふんしやうと申もの	ありければ	きこしめして	二ゐの	し、うのくらんと	中に	まいり給ひて	まいり給ひ候	てんかの御まへ、					つきたまひ	月日も	かけられける	のほり給ひける	あるへけれ
ふんせう	心ことも	天人	申はかりなくて	女子	ひせい	みて候か	こむぐの	有けん	おこなひ物	ふんせうと申物	有けれハ	聞召て	二位の	ゑぶのくらんと	なかに	参り給ひて	まいり給ひけるに	天下の御所へ	ふんせう 中			つきたまひける	月日	かけられ	のほり給ひし	有つれ	

6	うけ給候	60	上	17	あそひともに	あそひとも
7	つゐに	18	御ありさま	17	中しやう	中将
8	われもくと	4	御そてを	4	御ありさま	御有さま
9	きゝも入す	5	御そての	5	御そてを	御袖を
13	ありける	7	ひやうゑのすけ殿みかどめ	7	ひやうゑのすけ殿みかどめ	御袖の
14	中しやう殿	8	たまひて	8	きみの	ひやうへへのすけみかどめ給ひて
15	きこしめして	9	御心ちとうけ給候を	9	御心ち	君の
16	御心	10	御心に	10	いまゝて	御こゝろに
18	あこかれ	11	いとらさりけん事よ	11	さとりまいらせさりける事よ	いままで
1	その、ちは	17	ひやうゑのすけ殿	17	むまのすけ殿	ひやうへへのすけ殿
3	わか御心	18	きみの御心	18	御ありさまの	うまのすけ殿
4	うわのそら	1	いひたらんにつけて	1	うわのそら	君の御心
6	こひちに	2	いまはなにを	2	いまはなにを	御有さまの
8	てん上人	3	はるのころ	3	しゝうくらんとか	いてたゝんにつけて
11	われもくと	5	ざうしきふんしやうか	5	ありさま	うはのそら
12	申されけるは	6	われなから	6	さすかに	いまは何を
14	中しやう殿	7	世のそしり	7	さすかに	春のころ
15	まいらせん				よのそしり	ゑぶのくらんとか
						さうしきふんせうか
						有さまを
						我なから
						さすかにいかてか
						よのそしり

63																								
上																								
17	16	14	12	11	8	7	6	4	3	17	16	15	14	13	12	10								
ふんしやう下	うせにけり	見とをしのせう	おほす所に	申は	二るのちうしやう殿	いてさせ給ひて候	のたまへは	くにへ	京のもの	ととひければ	をのくはをのくは(衍カ)	まいらせてける	みちすから	くれなるになり	からころも	ゆき給ふに	ゆわぬゆくほとに	ましなむ	くもるに	くもらん	しきふのたゆふ	てりまさりゆく	かくなむ	ひやうゑのすけ
	うせにける	ミとをしのせう	おほすところに	申せは	二位の中将殿	いてさせたまひて候	の給へは	国へ	京の物	と、ひければ	をのくは	参らせてける	道すから	くれなるに也	から衣	行給ふに	いハひ行ほとに	ましなん	雲井に	くもらむ	式部のたゆふ	てりまさり行	かくなん	ひやうへのすけ

64																	63								
上																	下								
11	10	6	5	3	1	15	14	13	12	11	10	9	8	7	5	4	3	2							
申入候はんと	のたまへは	さても	ありけるよ	みえにもんをたてたり	みちしるへしけり	あるいゑに	げかうしたまふ	ふんしやう	ほんちくわんをん	まいり給ひて	まづ	ひたちのくにへつき給ふ	中しやう殿	たつねまいらせつるほとに	山々てらく	うたを	御そてに	すみたまひしかた	わたらせたまはす	たつねたまへとも	たまふとて	二るの中しやう殿うせさせ	いそきたまふ	おもひて	その、ちは
申入候はんとて	の給へは	さて	有けるよ	みへにもんを立たり	道しるへしける	有家に	けかうし給ふ	ふんせう	ほんちくはんをん	参り給ひて	まつ	ひたちの国へ付給ふ	中将殿	たつね参らせけるさる程に	山々寺く	哥を	御袖に	すみ給ひしかた	わたらせ給はす	たつね給へとも	とて	二位の中将殿うせさせ給ふ	いそき給ふ	思ひて	其後は

15 「ぶんせう」解説

下																
17	18	1	2	3	4	5	6	7	8	11	13	14	16	17		
いろ／＼を はるかせに おもひける ちきりのほとは き、しより しくれていてし いろをしるへにて まつにかゝれるふちの花 ちきりをめしたまへ なつはす、しきいつみ殿 をしとりを こひの百しゆを いろ／＼のこひしき人を しのふとはたつねれと もみち 女郎 ^{をみなへし} 花を おもふ心に そてに あこかれて つゆ しらきくの いろも ふゆはゆきに ふじのけふりのもえいて、 そらにたつ身そ かせのたよりの	色々を 春風に 思ひける 契りの程は 聞しより こかれて出し 色々をしるへにて 姿にかゝれる藤の花 契りをめし給へ 夏はす、しきいつみとの をし鳥を こひのひやくしゆを 色々の恋しき人を 忍ふとはたつねれと 紅葉 女郎 ^{をみなへし} 花を 思ふ心に 袖に あくかれて 露 白菊 ^{きく} の 色も しゆは雪に ふじのけふりのもへいて、 空に立身そ 風のたよりの															

上																
1	2	5	6	7	9	10	11	12	13	14	15	17	18	1	2	5
おもひ きへかへるこそ いろ／＼の てはこ くら もみちかさねのうすやうの まくらに はるは花さくら こひちに にいまくら これまでも ことにすくて ゐたる ひよとり ひは めしたまへ かはせたまへや きくやしかとうりたまふ ふんしやう き、しらす その中に 京のものにて なさけありて うたのみちも ありさまに 見え給ふなり	思ひ きえかへるこそ 色々の 手はこ くし 紅葉かさねのうすやうの 枕の 春ははなまくら 恋路に にひまくら 是までも ことにすくて いたる ひゑとり ひわ めし給へ かはせ給へや 聞やしるとうり給ふ ふんせう 聞しらす 其中に 京の物にて なさけ有て 哥のみちも 有さまに 見え給ふ也															

66														
上														
7	8	10	11	12	13	14	15	16	18	1	2	4		
ふせいなり 此くに、	くたり給ひて おほせをき、給ひ候はさり しをおもひのあまりに かたりたまひしを わかつてん上人たちき、給ひて もちいたまはしと おほしめして かゝるものをうり身をもや つし給ふ人やらんと 世に おもひける 事とも、 こひの心を ことをのみ のたまふ いて、きかせたまへと ふんしやうも つまどををしあけて き、ければ おもひて おもしろき 此人く これこそ ふんしやうよ	ふせいなり 此国に 下給ひて 仰を聞給ひ候はさりしを思 ひのあまりにて かたり給ひしを もし殿上人たち聞給ひて もちい給はしと (ナシ) かゝる物をうりみをもやつ し給ふ人やらんと よに 思ひける 事とも 恋の心を 事をのみ の給ふ 出てきかせ給へと ふんせうも つまとを、しあけて 聞ければ 思ひて おもしろき 此人く 是こそ ふんせうよ												
下														
6	7	8	9	10	13	16	18	1	2	3	4	5	6	7
身にしみてき、もあかねは おもひけるは 此人くを きかんとおもひ やとはとたつねければ まいりて候へは やととても ふんしやう これに かしまいらせんと のごひまいらせけり 中しやう殿 はるのころ ふししつみたま候ゆへ 御身を 見えたまへとも 見えたまはす ぶんしやうが せんたびつ あるらん 大しの あらふ ぬぐう おしきよとて ふんしやう 京あき人は	みにしみて聞もあかねは 思ひける 此人くを きかんと思ひ 宿はと尋ければ 参りて候へは 宿とても ふんせう 是に かし参らせんと ぬくひまいらせける 中将殿 春のころ ふししつみ給ひ候ゆへ 御みを みえ給へとも みえ給ふ ふんせうか せんたひつ 有らん 大事の 一人はあらふ ぬぐふ おかしきよとて ふんせう きやうあき人は													

17 「ぶんせう」解説

67																								
上																								
11	10	9		8	7	6	5		3	2	1	18	17	15	14	13	12			11	10	9	8	
おもひさためけると	きみも	なかつたまふ	さかつき	わかきみ	みんさまうちのほかは	人く	御まいりある	中く	中しやう殿にまいらせければ	まづのめと	くわんばくとと	ふんしやうしやうぎになをりて	いてけり	ふんしやうでいにいて、	わらひける	をかしさよ	わがおだいをは	くわせて	かな	きやうの人はをかしきもの	此ものとも	かしこまりけり	すゑたるを	と申
と	じんじやうに	しんしやうに	と申けり	すへたるを	かしこまりける	この物とも	京の人はをかしき物かな	くハせて	わかおたひをは	おかしさよ	はらひける	ふんせうでいにいて、	出けり	ふんせうしやうぎになをりて	くはんはくと	まづのめと	中将殿に参らせければ	なかく	御参りある	人く	みんさまよりほかは	我君	さかつき	なかし給ふ
君も	さためけると	なかし給ふ	さかつき	我君	みんさまよりほかは	人く	御参りある	なかく	中将殿に参らせければ	まづのめと	くはんはくと	ふんせうしやうぎになをりて	出けり	ふんせうでいにいて、	はらひける	おかしさよ	わかおたひをは	くハせて	京の人はをかしき物かな	この物とも	かしこまりける	すへたるを	と申けり	しんしやうに

68																										
上												下														
6	5	3	2	1		18	16	13		11	10		5	4	3	1	17	16	15	14	12					
文を	じんじやうさよ	これを	しらせん	こひちに	かくなむ	もみちかさね	したに	めつらしきものはまた見す	みたれとも	をよはざるてはこ	その、ち	をかしとそき、給ふ	これに	中しやう殿を	いりなんと	た、	おほせ候へとも	のたまひしかとも	仰せ候へとも	大みやうちわれもくと	ならびなし	たまはりて候	大みやうしんより	いやしきもの	ふんしやうは	あるへき事
ふみを	しんしやうさよ	是を	しらせむ	恋路に	かくなん	紅葉かさね	下に	めつらしき物はいまたみす	見つれとも	をよはさる手箱	其後	おかしとそ聞給ふ	中将殿を	是に	入りなんと	たた	仰せ候へ共	の給ひしかとも	仰せ候へ共	大みやうち我もくと	ならひなし	給りて候	大明神より	いやしき物にて	ふんせうは	有へき事

下																									
15	14	11	10	9	8		7		5	4	2	1	16	14	13	11	10	9	8			7			
ゆきて	ふんしやう	これをきゝて	ふんしやうがうちのもの	ひゝかしけり	しきぶは	ことを	ひやうゑのすけ	ひき給へは	おもひいてられて	御らんして	ひは	ありかたき	みだうへ	たひにけり	ふんしやう	いろ／＼うつくしき	とゝめ給ふ	なか／＼	御返し候へは	これなと	おもひてそのまゝ	きゝつるに	ことば	みず	これほと
行て	ふんせう	これを聞て	ふんせうかうちの物	ひゝかしける	しきふは	ことをそ	ひやうへのすけ	ひきたまへは	思ひ出られて	御覧て	ひわ	有かたき	御堂へ	たひにける	ふんせう	色／＼いつくしき	とゝめたまふ	中／＼	返し候へは	是ほと	思ひて其まゝ	聞つるに	言葉	みす	是程

69																				
上																				
17	1	2	3	4	7	8	10	11	13	15	16	18	2							
ゆき	ふんしやうは	みなゆきて	ゆきてみれば	ものともにわに	をのれらはなに事をしてかくあるそ	くわんけんの	いりければ	ふせひ	みだうへまいりて	まいりて	これほと	やさしきこと	まいりたる心ちぞ	これほと	ひきでものを	さま／＼のものを	わらひ申されけり	さるほとに	ひめきみたち	ふみののちは
下																				
ゆく	をそく	行て	ふんせうは	みな行て	物ともにには	おのれらは何事をし候てかく有そ	くはんけんの	入ければ	ふせい	御たうへ参りて	参りて	是ほと	やさしき事	参りたる心ちぞ	是ほと	ひきて物を	さまさまの物を	わらひ申されける	ふんせう	下
しかるに	ひめ君たち	ふみの後は																		

19 「ぶんせう」解説

70																	
上																	
17	14			12	10	9	8		7	3	1	18	17		11	10	9
御文の返しを 人をかしけにと おもひみたれてありけるが は、にのたまふやう 此人くくわんけん き、たく候へ のたまへは ふんしやうに此よし われも おもへ 女ばう いてた、せてみだうのうちを ふせひ あこかれて き、しりたまひてはちをと のけたかく てつかひ 身にしみ給ひけり 見えたまふへき 中しやう殿おほしめしける やうは あれ いかならむかせの おりふし 中しやう殿ひめきみと き、しよりも																	
御ふみの返事を 人おかしけにと 思ひみたれて有けるか 母にの給ふやう 此人くくわんけん 聞たく候へ の給へは ふんせうにこのよし 我も 思へ 女ばう 出た、せて御たうのうちを ふせひ あこかれて 聞しり給ひてはちのをとけ たかく 手つかひ みにしみ給ひける 見え給ふへき 中将殿おほしめすやうは あはれ いかならん風の 折ふし 中将殿ひめ君と 聞しよりも																	

71																	
上										下							
7	6	5	4	2	1	18		17	13	12	11	10		9	8	7	4
りふじん これには 中しやう殿をはしめたてま つりて そてを くわんけんも 人しらす そのかひ ふんしやう中しやう殿にお もひさしをそ 又 たひ給へは 又 ならし給ふなり ふんしやう きたに をしへまいらせければ しらせまいらせたる ふんしやうかなとわらひけり その夜 人しつまりてのちしのひ入て ひめきみも おろしたまはす ふしたまふ ありしす、り																	
りふしむ 是には 中将殿をはしめ奉りて 袖を くわんけんも 人しれす 其かひ ふんせう中将殿に思ひさし をそ また たひ給、り また ならし給ふ ふんせう 北に をしへ参らせければ しらせ参らせたる ふむせうかなとはらハれけ る 其夜 人しつまりて後忍ひ入て ひめ君も をろし給はす ふし給ふ 有しす、り																	

72																									
上												下													
8	7	6	3	2	1	18	15		13	10	6	1	18	17	14	13	12	10				9			
しのふとは	ちきりたまふ	ちにすまば	てんにあらはひよくのとり	わたらせたまひけり	おもひ給ひて	みやこにも	此世	とのたまへはひめきみ	又	夜はの	しらぬ身の	ちきりたまふ	ゑふの	中しやう殿は	のたまへは	おもひも	ぶもの	むすひては	あねきみは	心ゑ	たちいて	おもひて	しのひ入たまふ	やえの	中しやう殿はおもふ心を
忍ふとは	ちきり給ふ	にあらは	てんにすまはひよくの鳥地	たらせたまひける	思ひて	都にも	此よ	との給へはひめ君	また	夜半の	しらぬみの	契り給ふ	ゑふの	中将殿は	の給へは	思ひも	ちゝはゝの	むすては	心え	あね君は	たち出	思ひて	忍ひ入給ふ	八えの	中将殿は思ふ心を

下																									
17	14	13	10	9	8	7	5	4	2	1	18	16	15	14	13	12	11	10							
し給ふとき、	き、給ひて	きくなりとして	この	ふんしやうかところのみや	のたまへは	いひいたしたるに	ふんしやうにも	をきたまへ	きらひて	おなこなり	なにとて	ひめきみの	おもひて	ふんしやう	いてよ	いとおしかりて	ふんしやう	はらたちけり	をひいださん	この事くにへ	ちきりをむすひ給ふこそ	くにのかみこくし殿など	をんなこなり	き、て	人めしければ
し給ふと聞	聞給ひて	きく也として		ふんせうか所に都の	の給へは	いひ出したるに	ふんせうにも	をき給へ	きらいて	女子也	何とて	ひめ君の	思ひて	ふんせう	出よ	いとをしかりて	ふんせう	はらたちける	おひいださん	此事国へ	契りをむすひ給ふそ	国のかみこくしなど	女子也	聞て	人めしければ

21 「ぶんせう」解説

														73											
														上											
下																									
4	3	2	1	18	17	16	15	13	11	10	9	8	7	4	3	1	18								
らせす	ゆめうつ、ともおもひまい	中しやう殿を	見あけたまへは	みたうの	わがみは	さるほとに	おもひける	なにとも	しらせたまはすは	おもひ申へき	いつくしかりし人	これほと	ふんしやうおもひけるは	又	これは	ふんしやうがうちのもの	見え給ふ	ほ、まゆに	らうの	はかりにてやさしきわか上	かんふり	おほせを	くわんけんを	ふんしやう	おほせ
夢うつ、とも思ひまいらせす	中将殿を	見あけ給へは	御たうの	我みは	さる程に	思ひける	何とも	しらせ給はすは	思ひ申へき	いつくしかりける人	是ほと	ふんせう思ひけるは	また	是は	ふんせうかうちの物	見えたまふ	ほ、まゆに	若上らふの	はかりにてことにやさしき	かふり	仰を	くわんけむを	ふんせう	仰	

74																	
上																	
10	9	8	7	4	2	1	18	16	15	13	12	11	10	9	7	6	5
わたらせ給ふそよ のたまへは	きこへせ給ふちうしやう殿	此ころ	をのれ	ふんしやうを	みまいらせければ	ちうじやう殿よ	ちうしやう殿は上らうよ上 らうは	わがきみを	あき人なり	きもたましひ	ふんしやう	ひやうゑのすけ のたまふ	みるところ	ふんしやうは	かゝるところにしり申さき りしことの	うけ給候	二ゐのちうしやう殿
わたらせ給ふそよ の給へは	聞えさせ給ふ中将殿	このころ	おのれ	ふんせうを	見まいらせければ	中将殿よ	中将殿はじやうらうよじや うらうは	我君を	あきひと也	きもたましゐ	ふんせう	ひやうのすけ の給ふ	みる所	ふんせうは	かゝる所にしり申さき、りし 事の	うけたまはり候	二位の中将殿 国／＼を

下																										
12	13	14	17	18	2	3	5	6	7	8	9	11	13	14	15											
ふんしやうこれをうけたまはり	ゆめとのみおもひける	おもひつるに	てんかの御こにて	御むこ殿そや	物くるはしきやうにの、しりけり	おそれに	わがしゆくしよへ入まいらせて	わかくに	われもくとまいり	見えけり	さいわいを	われくを	申けり	中しやう殿はひめきみをひきぐして	みやこへ	まいりたまふときこへけり人々	上らうを	おほせられければ	おほせを	ふんしやうが						
ふんせう是をうけ給	夢とのみ思ひける	思ひつるに	天下の御子にて	御むこ殿はや	物のくるハかしのやうにの、しりける	をそれに	我しゆくしよへいれまいらせて	我国	我もくと参り	見えける	さいわいを	我々を	申ける	中将殿はひめ君をひきくして	都へ	まいり給ふと聞えける人も	ぢやうらふを	仰られければ	仰を	ふんせうか						

															75										
下															上										
5	4	2	1	17	15	12	11	10	9	7	6	5	4	2	1	18	16								
八かこくのものともきつたへ	ひめきみ	ことくなり	かきりたまひ	いつのようとして	なけきけり	見ねはせんねん二せんねん	のたまひ	あまつさへ	なりて	つかひてありつれとも	これをは下女はう	おそれ入	人は	二ゐの中しやう殿の	御こに	きこしめして	かくれなく	さもありなむと	しうの上らうも	おもふなり	やとひまいらせ	ちゝはゝも	上らうは	あるへき	きみの
八ヶ国の物とも聞つたへ	ひめ君	ことく也	かきり給ひ	いつのようにとて	なけきける	みねは千年二千年	の給ひける	あまさい	也て	つかいて有つれとも	是をはしも女はう	をそれ入	人を	二位の中将殿の	御子に	聞召て	かくれのなく	さもありなんと	しうのしやうらふも	思ふなり	やとひまいらせぬ	しやうらふは	父母も	有へき	君の

10	9	6	5	2	16	14	12	10	9	8	6	5	4	3											
下																									
此みとせは	九のえの	あさゆふ	いろふかく	てんしやうひさしく	御よろこひは	ちうしやう殿は	中なこんに	しかるに	ありけり	おはり	ありのまゝに	さためて	さそあるらん	ふんしやう	あねきみ	せんし	ふんしやうおやの身にてか	た時も	あるまし	あねきみの	此きみに	ちうしん	ありて	ちゝはゝ	
この三ねんは	九重の	あさゆう	色ふかく	てんしやうもさひしく	御よろこひ	中将殿は	中納言に	又やかて大しやうになり給	ふさるほとに	有ける	をはり	有のまゝに	(ナシ)	さそ有らん	ふんせう	あね君	せむし	ふんせうおやのミにてかた	ときも	有まし	あね君の	此君に	そうもむ	有て	父母

														78															
下														上															
3	1	18	16	14	12	10	8	6	4	3	2	18	17	16	14	13	11												
きには	この御かたを御らんせぬさ	たへかねて御ふみはかりそ	いてたまへり	まさりたまはしとそみえたまふ	さるほとに九のえのうちを	これ	申すもおろかなり	かたときもはなれたまはす	九のえの	ちゝはゝ	たくひ	女ごに	御身	つきたまふ	ひめきみ	みえけり	ちうしやうに	ふんしやう	ものなり	みめよきこ	あねきみ	ひめきみ	そのときちからなくて	くたされける					
には	此御かたを御らむせぬさき	たえかねて御文はかり	給へり	まさり給はしとそ見え給ふ	さる程に九重のうちをいて	是	申もおろかなる	かた時もはなれ給はす	九重の	ちゝ母	たくい	女御に	御み	つき給ふ	ひめ君	みえける	中将に	ふんせう	もの也	みめよき子	あね君	ひめ君	其時せひなくて	下されける					

